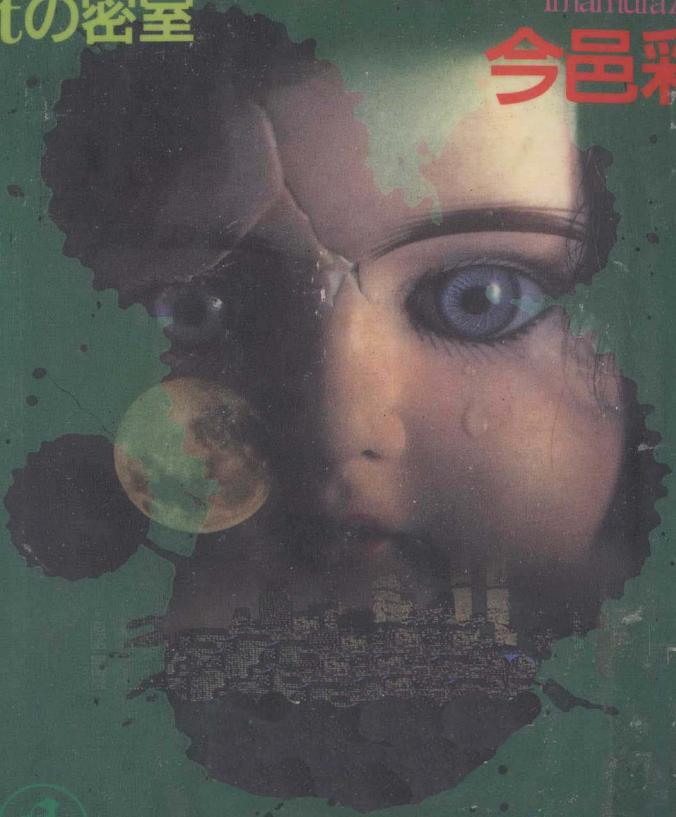
●長編推理小説

「裏窓」殺人事件

tの密室

Imamura Aya

今邑彩



光文社文庫
KOBUNSHA BUNKO

光文社文庫

長編推理小説
「裏窓」殺人事件　*t*の密室
著者　今邑彩

1995年2月20日　初版1刷発行

発行者　森元順司
印刷　堀内印刷
製本　光洋製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03(3942)2241(代表)
振替　00160-3-115347

© Aya Imamura 1995

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-72005-6　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03—3401—2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編推理小説

「裏窓」殺人事件
tの密室

今邑 彩

光 文 社

目次

プロローグ　5
第1章　墜ちた女　18
第2章　幻の男　31
第3章　死時計　57
第4章　消失　91
第5章　再び殺人　129
第6章　黒いアリバイ　166
第7章　疑惑　200
第8章　写真　222
第9章　tの密室　237
第10章　死者の花嫁　249
第11章　消えた靴　272
エピローグ　290
解説　新保博久　301

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

〝時〟こそ、けっして罰せられることのない殺人者なのだ。

――――「幻の女」より

プロローグ

鳥が妙に騒々しかった。

彼女はとうとう読んでいた雑誌をテーブルの上に伏せて置くと、立ちあがった。

鳥かごは東の出窓の棚になった部分に置いてある。

「どうしたの？」

鳥かごを覗きこみ、鋭い鳴き声をあげながら狂ったように飛び回っている黄色いセキセイに話しかけた。

買ったときにはつがいだったが、雄の方が死んで、雌だけが残っていた。

「どうしたのかしら……」

彼女は首をかしげて呟いた。

ふと子供の頃のことを思い出した。小学生のときだった。飼っていた文鳥がやはりこんな異様な興奮状態をしめしたことがあった。

ある夜、ベランダに出しておいた鳥かごがばかに騒々しいので、起きて見てみると、ぞっと

するような大きな鼠が鳥かごめがけて這いあがろうとしていたのだ。
懐中電灯の明かりに浮かび上がった鼠は、前足の爪を鳥かごの格子にかけたまま、横目を使って彼女を見た。
あのときの鼠の、血走った獣の目を、彼女は十五年たった今も忘れることができなかった。
しかし、ここは部屋の中である。小奇麗なマンションの掃除の行き届いた九階のワンルームだ。鼠はおろかゴキブリ一匹出たことはない。小鳥を脅えさせるものなど入り込む隙はないはずだった。
それなのに……。
「どうしたっていうの？　何を脅えているの。怖いものなんて何も来やしないわよ」
彼女は小さな子供をあやすように言って、鳥かごを人さし指でつついた。
それでも小鳥は鎮まらなかった。狂ったような黄色い羽ばたきをやめようとはしない。
ふと見ると、水入れの水が少なくなっているのに気が付いた。こんなことで騒いでいるとは思えなかったが、水を入れてやることで鎮まるかもしれないと彼女は思った。
鳥かごの戸を開けると、手を差し入れた。ばたばたと飛び交っていた小鳥の翼が手の甲を打つ。水入れを取り出し、キッチンに行き、水を足して戻ってくる。また戸を開けて、水入れを戻そうとしたときだった。
左の頬にさっと撫でるような冷気を感じた。

南のベランダに面した窓が、換気のために僅かに開いていたが、冷気はそこから入ってきたのではなかった。それならば、右の頬にそれを感じたはずである。
冷蔵庫を開けたときのようなヒヤリとした感触は北側の壁から突然やって来たのだ。
彼女は首をひねって壁を見た。
そこには、一枚の古い油絵が掛かっていた。
漆黒のビロードのような闇に向かって、なかば開きかけた観音開きの窓の絵である。
ガラスはヒビ割れ、蝶番は錆び付き、凝った装飾を施した二つの取っ手の間には、夜露をたたえた銀色の蜘蛛の巣が、まるで窓がそれ以上開くことを封じるかのように、ふわりと掛かっていた。
一瞬、その蜘蛛の巣が風をうけて微かに震えたように見えた。
「まさか――」
彼女は笑いながら小鳥に話しかけた。
「あそこから何かが来るの？」
黄色い小鳥はそれに応えるかのように、激しく小さなからだを鳥かごにぶつけた。
彼女の白い顔から笑みが消えた。
そのとき、玄関のチャイムが鳴り響いた。

*

ベランダの方から鋭い鳴き声がした。
少女はびっくりしてノートから顔をあげた。「先生。今のなに？」
テーブルを挟んで向かいあっていた先生に思わずたずねる。先生はベランダに背中を向けてテーブルに頬杖をつき、数学の参考書をめくっていた。
「セキセイじゃないかしら。上の人が飼ってるみたいだから」
参考書から目を離さず、ものうげに答える。
少女は鉛筆を握ったまま、ポカンとした表情でベランダの方を見つめた。ガラス戸には白いカーテンがかかっている。
「あ」
少女は口を開けた。
そのガラス戸に羽ばたく鳥の影が映ったのだ。
「先生。今、あそこに鳥の影が」
握ったままの鉛筆でベランダの方を指した。
「早苗ちゃん」
先生はやっと参考書から顔をあげ、軽く睨むように少女を見た。

「高校入試まであとどのくらいあると思ってるの？」
「でも、今、鳥が――」
「鳥なんかどうでもいいでしょ。あなたは数学が苦手なんだから、もっと身を入れなくちゃ駄目じゃない。少しはゆみちゃんを見習いなさい」
もう一人の大柄な少女は二人の会話など耳に入らないかのように、ノートをなめるような姿勢で、一心不乱に鉛筆を動かしていた。
「はい……」
少女は鉛筆の尻で頭をゴリゴリ掻きながら、渋々、広げたノートに視線を戻した。
そして、こっそりと腕時計を眺めて、ため息をついた。
九時十分になろうとしている。
このささやかな勉強会が終わるのは十時。
あと五十分もある。
あくびをしかけた口を手で押えたとき、隣りの部屋から赤ん坊の泣く声がした。
先生は舌うちして立ち上がると隣りの部屋へ行った。
少女は、潜っていた人が息をつぐように、またヒョイと顔をあげた。
そのとき、ガラス戸の外に奇妙な影を見た。鳥の影ではない。もっと大きな影だった。影はガラス戸を上から下にスッと横切った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

少女は自分の目を疑った。
なに、あれ？
「ねえ、ちょっと……」
隣りの少女を肘でつついたが、「うるさい」というにべもない返事が戻ってきた。
赤ん坊の声が止んだ。
先生がすぐに戻ってきたので、慌ててノートに顔を伏せた。
並んだ数式が頭のなかで踊っている。
今のあれ、何だったんだろう。
少女はそのことばかり考えていた。

*

純子は夢を見ていた。
銀色の弾丸のような魚になった夢。海を自由自在に泳ぎまわっていた。ゆらめく海草の合間に、おいでおいでをするようにフラダンスを踊っているミミズを見付けた。
それに突進して、体よりも大きな口をあけてパクリとやった瞬間、チクリと口を刺す痛み。ぐいと上に引き上げられた。
いやよ。何するの。私はまだここで泳いでいたい。ここでこうしているのは、とっても気持

ちがいいんだもの。

じたばたしながら純子は叫んだ。でも、針のささった口から出るのは血の混じった泡ばかり。

ダークブルーのガラス板のようなものが見えてきた。その向こうにボンヤリと青白いお月さまが浮かんでいる。

お月さま？

「――ちゃん」

肩を強く揺すぶられて、だんだん目の焦点が合ってきた。お月さまは眼鏡をかけている。なんだ、お月さまなんかじゃない。ハウスキーパーの大野さんの顔だ。

大野マサエの人の好さそうな丸顔が、やや心配そうな表情を浮かべて、斜め上から見下ろしていた。

「あ、おばさん」

純子は間の抜けた微笑を浮かべた。

部屋のなかはエアコンがほど良く効いて日だまりにいるような暖かさ。夕食後、ついうとうとしてしまったのは、腹の皮が突っ張ったところへ、この暖かさが加わったからだろう。

「今、何時？」

まだウスボンヤリとした頭で訊く。

「もうすぐ九時ですよ。ほら、純子ちゃんの好きな番組のはじまる時間」

おばさんは腕時計を見ながら言った。純子も反射的に棚の上のデジタル時計に目を遣った。今まさに、8・58が8・59に変わろうとしている。

夕食を終えたのが、七時半頃だったから、一時間半も眠ってしまったらしい。純子は慌てて枕元を探ってテレビのリモコン装置をつかんだ。月曜日の九時からいつも欠かさず見ているミステリードラマがあるのだ。

ところが、リモコンのボタンを何度押しても、手応えがない。テレビの画面は無愛想なダークグレイのままだった。

何度も試したあとで、純子は不満そうな声をあげた。

「テレビつかないよ」

「リモコンの電池、切れてるんじゃない？」

おばさんはそう言って、テレビのスイッチを入れたが、それでも画面は灰色のままだった。

「あらっ。どうしたのかしら」

「ちゃんとコンセント入ってる？」

純子はいらいらしながら上半身を起こした。早くしないと番組がはじまっちゃう。

「コンセントは入ってるけど……」

おばさんはくすんだグリーンのセーターに押し込めた小太りの体を窮屈そうに折り曲げて、テレビの裏がわを覗き込んだ。ベッドに起き上がっている純子の方に臼のような立派なお尻を

見せて。

「どこか、接触が悪くなったのかしらね。困ったね。わたしはどうもこういう機械は苦手でねえ」

テレビの裏からもぞもぞ言う。もうっ。こんなとき、お兄ちゃんがいてくれたら。テレビの故障くらい、一発で直してくれるのに。もっともメカに強いお兄ちゃんは今頃は海の向こうで生涯で最も甘美な一時を過ごしているはずだ。花嫁の祥子(しょうこ)さんと。

つまり、新婚旅行の真っ最中というわけだ。

「だめだ。わたしには分からない」

おばさんはやけにアッサリとあきらめて体を起こすと、腰のあたりを手で撫でた。

こういう人が、駅の切符販売機や銀行の自動払出し機の前でもたもたして、後ろに長い列を作ったりするのよね。

純子は八つ当たり気味の視線をおばさんのお尻から棚のデジタル時計に移した。時計は9・10を示している。あーあ、もう始まっちゃってる。

台所のポットがピーピー悲鳴をあげている。

「ごめんね。明日の朝、電気屋さんに来てもらうから」

おばさんはまるで自分で壊したような済まなさそうな顔で言うと、「コーヒーでもいれようか」と、純子のご機嫌を取るようにつけ加えた。

「うん……」

おばさんに怒ってみてもしようがないか。あのテレビも相当ガタが来ているはずだし。純子はリモコンを放り出して、ため息をついたが、すぐに気を取り直した。

テレビが駄目なら、バードウオッチングでもするか……。

純子が寝ているベッドは窓際にある。

おばさんの姿が台所に消えるのを見届けてから、双眼鏡を取り出すと、手を伸ばして、窓を少し開けた。

夜の冷気が猫のようにスルリと入り込み、純子の剝き出しのうなじを撫でた。

双眼鏡を目にあてると、きらめく夜の街が、宝石をちりばめた暗色の裳裾が、楕円形の視界のなかに生き生きと甦る。

純子は双眼鏡の位置をいつものマンションに固定した。純子が住んでいるマンションから、百メートルほど離れたところに、いくつかの背の低い雑居ビルを挟んで、やはりマンションらしい建物が建っていた。

府中にあった生家を売り払って、今いるマンションに兄とともに引っ越して来たのは二年ほど前のことだが、いつ頃からか、退屈しのぎに双眼鏡を覗いているうちに、向かいのマンションに興味を持つようになった。

もっとも、向かいのマンションをいくら覗いていても、半裸に近い恰好でダンスの稽古をす

る若い娘にも、自殺未遂のミス・ロンリーハートにも、売れない音楽家にも出会ったことはない。

まして、病身で口やかましい妻を殺してバラバラにしてしまったセールスマンなどには！

現実は映画のようにはいかない。たいていの窓は厚いカーテンに閉ざされて、味気無い顔を見せていた。そこにどんな人間が住んでいるのか見当もつかなかった。

あの映画が作られた頃とは時代が違う。エアコンの普及が、どんな蒸し暑い日でも住人に窓を開けることを忘れさせてしまったのだ。

それでも、いつの頃からか、「お気にいり」の窓ができた。エメラルドグリーンのカーテンの出窓。最上階の角部屋だった。間にある五階建てのビルが邪魔をしていて何階にあたるのかはハッキリとは分からないが、純子の部屋が八階だから、あちらの窓もそのくらいだろう。

住んでいるのは、肩まである髪を真ん中で分けた若い女性のようだ。昼間は勤めているらしく、休みの日など窓辺で姿を見かけることがあった。純子はひそかに、この女性を「ユデタマゴさん」と呼んでいた。一重瞼の、白いツルリとした顔立ちがどことなく剝きたてのユデタマゴを思わせたからだ。

しかし、純子が興味をもったのは、「ユデタマゴさん」本人ではなかった。彼女が出窓の棚にいつも置いている鳥かごの中の黄色いセキセイインコの方だった。

セキセイは昔、まだ父も母も生きていて、純子が歩けた頃、飼っていたことがあるので、な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton